

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 20 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652018

研究課題名(和文) 古代ギリシア・ローマ美術史における「祈り」の図像に関する社会学的考察

研究課題名(英文) Iconography of Prayer in Ancient Greek and Roman Art: Essay of Sociological Approach

研究代表者

長田 年弘 (OSADA, Toshihiro)

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：10294472

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：古代ギリシア・ローマ美術史における、広義の「祈り」(「嘆願」、「崇拜」、「オランス」)図像について、作例を検証した。特にギリシア時代の「嘆願」と、ローマ時代の「オランス」に、女性を「祈り」の主体とする作例数が多いことに着目し、社会的弱者の「祈り」と、道德等の社会規範との関わりに目を向けた。小堀馨子(古代宗教史)は専門的見地から参加し、「命乞い」などのネガティブな価値判断を与えられた「嘆願」図像が、「敬虔さ」を表すポジティブな「崇拜」および「オランス」図像に転用された現象について検討を行った。期間中に5回の研究例会を開催し、最終的な研究成果に関して報告書を編集、刊行、専門研究者に配布した。

研究成果の概要(英文)：In this project the iconography of divination, prayer, veneration and hiesia in the ancient Greek and Roman art was intensively researched. The representation of hiesia in the Greek art and the one of orans is especially found in female figures, so the relationship between the social norm and the religious prayer was particularly analysed. The development from the negative connotation of coward behavior, often found in hiesia representation, into the positive connotation of pious gesture of orans was discussed about. Academic meetings was regularly held five times, and the research result was edited and printed in a volume, whose copies were distributed to the scholars majoring in the classical archaeology and the classical history as well.

研究分野：美術史

キーワード：美術史 宗教史 古代ギリシア 古代ローマ 考古学 神話 初期キリスト教 祈り

## 1. 研究開始当初の背景

ギリシア古典期における「嘆願」および「命乞い」の図像に関しては、T. J. McNiven が 2000 年に発表した論考がある。McNiven によれば、命乞いのような恐怖を示す仕草は、ギリシア美術では女性（アマゾン）や子供（ガニュメデス）など、限られた人物表現にしか現れないという。古典期アテナイ美術においては、民主主義体制を支える男性市民のみが勇気と自制心を有することが示され、身振り言語の表現には、当時の社会規範が関係していたと結論する。代表者は、「嘆願」図像について、民主政ポリス内における市民的「名誉」等の価値観との関連を論じ、これまで 4 篇の論考を発表してきた。「嘆願」図像に関する社会的アプローチは、広義の「祈り」図像の成立に関しても新しい視点を与えると思われる。

## 2. 研究の目的

(1) 古代ギリシア・ローマ美術史における、広義の「祈り」（「嘆願」、「崇拜」、「オランズ」）図像について、作例を検証する。特にギリシア時代の「嘆願」と、ローマ時代の「オランズ」に、女性を「祈り」の主体とする作例数が多いことに着目し、社会的弱者の「祈り」と、道徳等の社会規範との関わりを目を向ける。小堀馨子（古代宗教史）は専門的見地から参加し、「命乞い」などのネガティブな価値判断を与えられた「嘆願」図像が、「敬虔さ」を表すポジティブな「崇拜」および「オランズ」図像に転用された現象について検討を行う。

(2) 各作例における「祈る者」は、しばしば墓碑などの葬祭図における同様の図像との関連性が深いと思われる。田中咲子、篠塚千恵子、中村 りい、いずれも古代ギリシア葬祭図に関して論考を発表しており、研究領域を開拓することができる。また、近年の、「古代宗教と女性」に関する活発な議論を背景に研究を進める（J.B. Connelly, *Portrait of a Priestess*, 2007; N. Kaltsas et al. eds., *Worshipping Women. Ritual and Reality in Classical Greece*, 2008; 篠塚千恵子 2010, 2011）。古代ギリシア美術史、古代ローマ美術史、古代ローマ宗教史のそれぞれの専門家による共同研究とし、古代における「祈り」の概念の成立を解明する。

## 3. 研究の方法

(1) 古代宗教史における「祈り」の概念については、2005 年に二つの重要な論考が発表された。共に、*Thesaurus Cultus et Rituum Antiquorum*, Vol. 3, Los Angeles 2005 に掲載され、それぞれ、ギリシア美術・文学、ローマ美術・文学における「祈りとその手順」

に関して論じる。（前者は D. Jakov, E. Voutiras, 後者は V. Fyntikoglou, E. Voutiras による。105-141 頁および 151-179 頁。）ただし、これらの論考においては、個々の図像の成立と意味の転用については全く言及されていない。とりわけ、本計画は「祈る者」に着目することにより次の 2 点について新しい問題提起を行う。

(2) 「嘆願」から「崇拜」へ、ギリシア美術史における変遷について考察する。先述のように、「嘆願」の身振りは、古代ギリシア美術においては、女性、子供の他、ペルシア王のような東方異民族や、ヒッピアスのような実在の専制権力者の「臆病な」仕草としてのみ表された。これらは、明らかな侮蔑の対象としての表現である。これに対して「崇拜」の身振りとは、前 4 世紀を中心として崇敬者の図像に用いられ、「敬虔さ」の表出として明らかな肯定的なニュアンスを伴う。しかし、美術において、前者の図像（身振り言語）から後者のそれが分岐した様相については、問題提起そのものがなされていない。

(3) 「オランズ」図と祈る者について、ローマ美術史における変遷について考察する。初期キリスト教美術における「オランズ」図像は、主としてカタコンベ壁画とローマ石棺に見られる。その多くは女性の仕草として表現されているが、「敬虔さ」を表現するに際して「祈る者」の性別に着目した議論は管見の限りこれまでなされていない。Zanker 1995 が指摘するように、石棺における「夫婦像」は、ローマ女性が男性と対等に表現された最初の例であった。（キリスト教石棺においては、夫である男性市民の「敬虔さ」は聖書を読む仕草によって表されることが多い。ローマ美術におけるこの「巻物を読む男性座像」の図像は、元来、古代ギリシア美術における「哲学者」図像から派生したもので、社会的には、ローマ市民の抱いていた villa における理想的な生活の表現と関わる。長田年弘 2003; P. Zanker 1995.）

## 4. 研究成果

(1) 2012 年 6 月 30 日に、第 1 回研究例会を行った。研究代表者による共同研究に関する趣旨説明の後に、研究発表、河瀬 侑（筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻博士前期課程）「ハルピュイアイの墓 前五世紀リュキア地方の葬祭美術」。標記の墓図像には、「嘆願」の図像が表されている。葬祭美術における「嘆願」の図像と「祈り」の図像について討論を行った。2013 年 2 月 2 日に、第 2 回研究例会を行った。中村 りい（東京藝術大学美術学部 非常勤講師）による「The Greek Body」展のガイドと見学（於東京藝術大学アートプラザ）の後に、研究発表、小堀馨子（国立音楽大学音楽学部 非常勤講師）

「古代ローマ人の宗教の特質 religio 概念を手掛かりとして」『古代ギリシア身体芸術に関する展覧会見学の後に、古代ローマ史の立場からの発表を主題に討論を行った。

(2) 2013年6月30日に、第3回研究例会を行った。研究発表、中村友代(実践女子大学文学部 助教)「留学を終えて トルコ踏査報告」、田中咲子(新潟大学教育学部 准教授)「研究動向紹介：古代ギリシアにおける年寄り 墓碑浮き彫りを中心に」、中村るい(東京藝術大学美術学部 非常勤講師)「パルテノン彫刻の受容 日本の美術大学の場合」。それぞれ、古代ギリシア世界の、東部(現トルコ共和国)作例に関する調査と報告、葬礼芸術と宗教美術との関連、パルテノン芸術と日本の大学における研究について、それぞれの発表を主題に討論を行った。

(3) 2014年6月29日に、第4回研究例会を行った。研究発表、森園敦氏(長崎県美術館学芸員)「アントニオ・ロペスのリアリズム 古代美術との関連を中心に」、田中咲子(新潟大学教育学部 准教授)「死の受容過程における公と私のイメージ 古代ギリシアの葬礼美術から」。前者については、スペイン現代芸術と、古代ギリシア美術受容の問題について、後者については、葬礼芸術と宗教美術との関連について討論を行った。2015年3月21日に、第5回研究例会を行った。研究発表、坂田道生(千葉商科大学商経学部 非常勤講師)「トラヤヌス記念柱の意義に関して」、小堀馨子(国立音楽大学音楽学部 非常勤講師)「古代ローマにおける「オランス」図像と祈りの仕草について」。前者は、古代ローマ記念碑における浮き彫りの社会学的な考察を主題に討論を行った。後者においては、古代ギリシア美術史における「崇拜」の図像が、ローマ美術史および初期キリスト教美術史において、いわゆる「オランス(祈り)」図像へと変遷する過程について、発表を主題として討論を行った。三年間の共同研究の成果について考察し総括とした。

(4) 平成24年度～平成26年度科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究)研究成果報告書『古代ギリシア・ローマ美術史における「祈り」の図像に関する社会学的考察』(2015年3月)を編集刊行した。論文執筆者は、研究代表者、分担者、協力者の、長田年弘、河瀬侑、小堀馨子、坂田道生、高橋翔、田中咲子、中村るい、福本薫、Gianfranco Adornato(ピサ高等学院)。報告書は、専門研究者139名に送付した他、内外の学会等において配布。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 20 件)

中村 るい、ギリシャ・クラシック期の< 神人同形主義 >に関する考察 自然主義と超越性、古代ギリシア・ローマ美術史における「祈り」の図像に関する社会学的考察、平成24-26年度科研費、挑戦的萌芽研究 研究成果報告書、査読無、2015、60-62

Toshihiro Osada, Ist der Parthenonfries sinnbildlicher Ausdruck des athenischen Imperialismus? in: E. Trinkl, ed., Akten des 14. Oesterreichischen Archaeologentages am Institut fuer Archaeologie der Universitaet Graz vom 19. bis 21. April 2012. Phoibos Verlag; Wien, 2014, 307-314 (査読無)

長田 年弘、「記憶」と「敬虔」の径庭 アクロポリス奉納文化におけるパルテノン・フリーズ、西洋美術研究、査読無、No. 17、2013、29-49

長田 年弘、パルテノン・フリーズ浮彫における女性とメトイコイ - 「民主政賛歌」説の批判 -、西洋史研究、査読無、第42号、2013、191-205

長田 年弘、パルテノン・フリーズ 贅美を尽くした捧げ物、藝叢、査読無、28、筑波大学人間総合科学研究科芸術学研究室、2013、1-10

篠塚 千恵子、永久の宴 エトルリアの死生観、墓は語るか 彫刻と呼ばれる、隠された場所(展覧会カタログ)、査読無、2013、50-62

篠塚 千恵子、気になる素描 パルテノン調査余話、美史研ジャーナル、査読無、第9号、2013、36-54

中村 るい、パルテノン・フリーズの神々 身体・空間・神性の顕現、東京藝術大学美術学部紀要、査読無、51号、2013、75-89

Toshihiro Osada, Die Entmythologisierung des Alexandermosaiks an der Darstellung des Dareios, in: Akten des 13. Oesterreichischer Archaeologentag. Klassische und Fruehaegaeische Archaeologie. Paris-Lodron-Universitaet. Vom 25. bis 27. Februar 2010. Phoibos Verlag; Wien, 2012,

145-152 (査読無)

長田 年弘、奉納浮彫としてのパルテノン・フリーズ、西洋古典学研究、査読有、LX、2012、25-36

中村 るい、パルテノン以前の身体表現、五浦論叢 (茨城大学五浦美術文化研究所紀要)、査読有、19号、2012、25-44

中村 るい、パルテノン神殿のフリーズ彫刻について、世界史の研究、査読無、232号、2012、24-31

〔学会発表〕(計 20 件)

Toshihiro Osada, The Invisible God, in: New approaches to the temple of Zeus at Olympia. Architecture, Sculpture and Recent Technologies. 2014年5月9日、ブダペスト(ハンガリー共和国)

Toshihiro Osada, Unsichtbare Goetter. Darstellung der Intervention der Gottheit in fruehklassischer Zeit, 15. Oesterreichischer Archaeologentag in Innsbruck. 2014年2月27日、インスブルック(オーストリア共和国)

篠塚 千恵子、《墓と彫刻の表象》、「彫刻と呼ばれる、隠された場所」展覧会シンポジウム、2013年5月25日、武蔵野美術大学美術館(東京都小平市)

長田 年弘、パルテノン・フリーズ浮彫における女性とメトイコイ - 「民主政賛歌」説の批判、西洋史研究会大会(共通論題「歴史家のわかること、わからないこと - 西洋古代史学と歴史関連学」論点開示)、2012年11月11日、東北大学(宮城県仙台市)

Toshihiro Osada, Ist der Parthenonfries sinnbildlicher Ausdruck des athenischen Imperialismus? in: 14. Oesterreichischer Archaeologentag in Graz. 2012年4月20日、グラーツ(オーストリア共和国)

〔図書〕(計 2 件)

- ① 本村 凌二、中村 るい、ちくま学芸文庫、古代地中海世界の歴史、2012、271(145-162, 221-239)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

長田 年弘 (OSADA, Toshihiro)

筑波大学・芸術系・教授  
研究者番号：10294472

(2)研究分担者

篠塚 千恵子 (SHINOZUKA, Chieko)  
武蔵野美術大学・造形学部・教授  
研究者番号：80279801

(3)連携研究者

中村 るい (NAKAMURA, Rui)  
高知大学・教育研究部・准教授  
研究者番号：50535276

(4)研究協力者

河瀬 侑 (KAWASE, Yuki)

小堀 馨子 (KOBORI, Keiko)

坂田 道生 (SAKATA, Michio)

高橋 翔 (TAKAHASHI, Sho)

田中 咲子 (TANAKA, Emiko)

中村 友代 (NAKAMURA, Tomoyo)

福本 薫 (FUKUMOTO, Kaori)

山本 悠貴 (YAMAMOTO, Yuki)